

参加型山村活性化事業における住民協働意欲醸成・持続の課題

～徳島県上勝町アートプロジェクトの地元協力者ヒアリングを通して～*

Qualitative Analysis of Issues on Public-Participation-Based Project Management by a Rural Town Office -Case Study of “KAMIKATU Art Project”-*

藤田卓弥**・滑川達***・山中英生***

By Takuya FUJITA**・Susumu NAMERIKAWA***・Hideo YAMANAKA***

1. はじめに

近年、少子高齢化、過疎化、地域産業の衰退などの中山間地域における諸課題が、より一層顕在化してきた。それらの諸課題を解決するために行われる参加型山村活性化事業には地域住民の協働意欲が必要とされている。また本研究が取り上げる芸術活用型まちづくりは、芸術を中山間地域に配置することによって、その地域の生活様式を強く印象付け、地域活性化を促すというまちづくりのことである。このようなまちづくりにおいて地域全体を巻き込み活性化を実現させていくためには、地域住民の「プロジェクト内容」の理解と「プロジェクトが繋げる社会的価値」の理解や実感に基づく協働意欲の醸成・持続が非常に重要であると考えられる。

そこで本研究では徳島県上勝町のアートプロジェクトを調査対象とし、町役場産業課を中心とするプロジェクト事務局からの情報に対する地域住民が求めている潜在的ニーズの分析を通して参加型山村活性化事業における住民協働意欲醸成・持続の課題を整理し、その改善に向けての基礎的知見を得ることを目的としている。

2. 概要

(1) 徳島県上勝町

徳島県南西部の勝浦川上流に位置する上勝町は、人口が約 2100 人、面積は約 110 km²の町である。面積の 86%が山林であり、過疎化、高齢化の進んでいる中山間地域であるが、ゴミの削減を目標としている「ゼロウェイスト宣言」、葉っぱ産業として知られる「いろどり」などの活動は、全国的にも紹介されている。

*キーワードズ：参加型まちづくり、住民協働意欲、アートプロジェクト

**正員、福井県小浜市役所

(福井県小浜市羽賀5-1、TEL0770-52-2960)

***正員、工博、徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部（地域創生センター併任）

(徳島県徳島市南常三島町2-1、

TEL088-656-7350、FAX088-656-7579)

(2) 上勝アートプロジェクト

上勝アートプロジェクトは平成 19 年度に徳島県で行われる国民文化祭の上勝町における事業として始まり、その後も継続的活動を目指している。主な事業内容は上勝町の 5 地区に著名な作家が訪れ、作品の製作と設置を行うというものである。この事業は間伐材などの材料提供や製作協力など様々な地元住民の協力を必要不可欠としている。さらにこの「プロジェクトが繋げる社会的価値」として、例えば上勝町の美しい里山の景観形成やその適正管理につながる可能性を有していると考えられる。

なお、上勝アートプロジェクトでは、図-1 で表すように現在まで、8 回の勉強・準備活動、32 回の PR 活動、19 回の委員会や会議を実施し、様々な形で住民に情報を発信してきた。

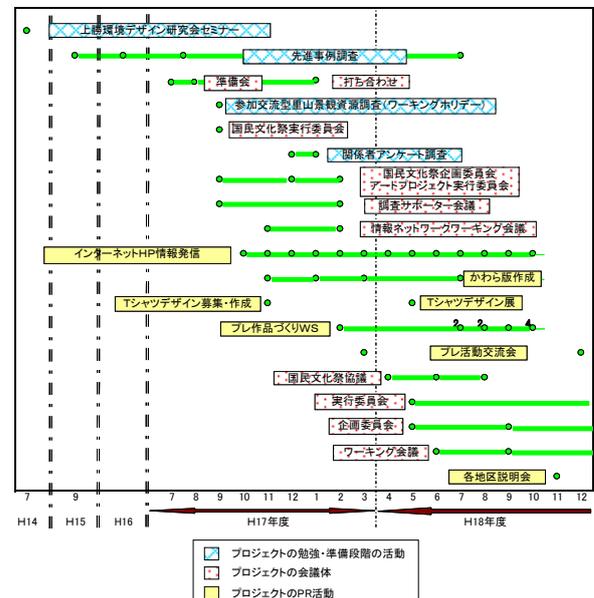


図-1 上勝アートプロジェクトの活動変遷状況

3. 上勝アートプロジェクト関係者ヒアリング調査

ヒアリング調査の目的は、上勝アートプロジェクトプロセスにおける事務局からの情報発信状況の中で参加者が感じていた雰囲気や思いを知り、事務局に対する潜在

的ニーズを把握することである。ヒアリング調査対象者はプロジェクトに参加している地元住民8名、地元NPO関係者2名、地元企業関係者1名であり、ヒアリング調査は過去の会議等のまとまった時期ごとに行った。調査項目は「このころ期待していたことは何ですか」や「このころ欲しかった情報は何ですか」など各時期、13項目となっている。

ヒアリング調査で得られた意見より、町内参加者が求めている潜在的ニーズは3つの理解から構成されていることが判明した。さらにそれぞれの理解に基づく意見は満足意見と不満意見に判別している。その3つの理解とは以下のようにになっている。

理解① 「事業の責任体制と意思決定プロセス、国民文化祭までのスケジュールの理解」

この理解は、事業主体の責任体制のあり方やプロジェクトの意思決定プロセス、国民文化祭の詳細やそれまでのスケジュールの理解のことである。例えば、「(国民文化祭を見据えて)作品づくりの段取りがわかってよかった。」という意見は満足意見、「このプロジェクトの事業主体は誰なのかわからない。」という意見は不満意見にあたる。

理解② 「芸術作品が持っているコンセプトの意義と作家の人柄の理解」

この理解は、作品の説明や作家の芸術に対する思いを聞くことによって深まる理解のことである。例えば、「作家自身がコンセプトをもって取り組んでいるし、期待度が高まった。」という意見は満足意見、「作品のコンセプトが思っていたコンセプトとは違うなと思った。」という意見は不満意見にあたる。

理解③ 「芸術作品が上勝にできることの将来的意義の理解」

この理解は、「このプロジェクトによってこの町、この地域もしくは自分にどのようなメリットを将来的に与えることになるのか」ということの意味である。例えば、「プロジェクトを通して上勝の周知や若者の定住のきっかけになればと思った。」という意見は満足意見、「国民文化祭への参加に当たってアートにこだわる意味がわからなかった。」という意見は不満意見にあたる。

理解①・②は「プロジェクトの内容」、理解③は「プロジェクトが繋げる社会的価値」を意味していると考えられる。そして各理解の意見数の比率の推移を表したのが図-2である。図-2より理解③のニーズが減少していることが読み取れる。

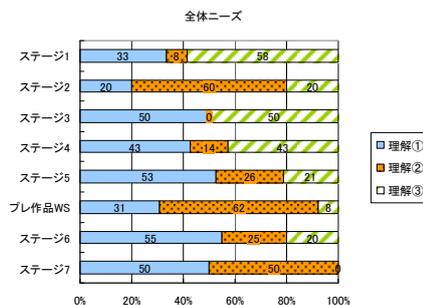


図-2 参加者が求める理解の推移

(1) 理解①「事業の責任体制と意思決定プロセス、国民文化祭までのスケジュールの理解」

図-3は理解①に基づく満足意見数と不満意見数の割合を、理解①の充足度としてその推移を示したものである。

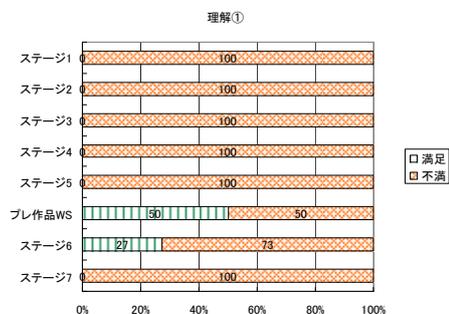


図-3 理解①の充足度の推移

この図より、地域住民は常に理解①を補う情報を求めていることが挙げられる。

その具体的意見の推移を分析すると「事業主体がわからない。」などの事業の責任体制のニーズから「具体的スケジュールを言ってほしかった。」などの今後のスケジュールのニーズに移行していることがわかった。

プロジェクトプロセスの初期の平成17年度の段階では、2つの事業主体が混じっているため事務局に対する不満が目立った。この2つの事業主体というのは、町役場産業課とまちづくり専門家であり、平成17年度は町に国民文化祭のための予算が不十分であったため、まちづくり専門家が独自に「全国都市再生モデル調査」の事業として会議を立ち上げた経緯を持つ。そこで国民文化祭による上勝アートプロジェクト(以下国民文化祭)と全国都市再生モデル調査による上勝アートプロジェクト(以下アートプロジェクト)を区別するため各会議のプログラム項目、議事録による意見質問、録音テープによる意見質問を、国民文化祭とアートプロジェクトに分類し、それぞれの時期における個数を集計し、その構成比率の変遷を整理した。その集計結果を図-4に示す。こ

の結果より、平成17年度はアートプロジェクト中心又は国民文化祭とアートプロジェクトの混合の話題となっており、平成18年度は国民文化祭中心の話題になっていたことがわかる。

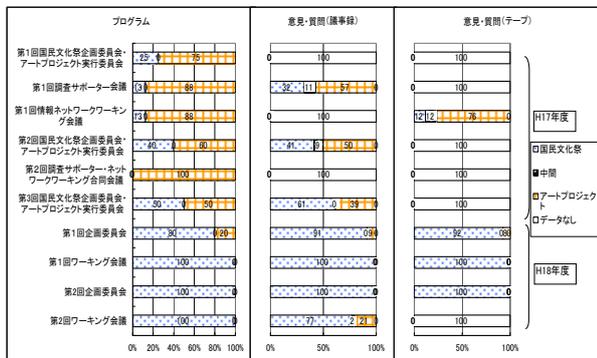


図-4 議題・意見数にみる国民文化祭とアートプロジェクトの割合

よって平成17年度は参加者から見れば事業主体・事業の責任体制がわからず、事業に参加するための精査がうまく行われなかったと思われる。

そして平成18年度になると国民文化祭を全面に出しており、事業主体がわかりやすくなっている。このように事業主体を明確にし、責任体制を明らかにすることによって、参加者の事務局メッセージに対する精査可能性が高まりプロジェクト受容への段階へ進みやすくなるものとする。しかし、国民文化祭が間近に迫っているため今後のスケジュールなど更なる情報を求めている様子が伺える。よって理解①は、今後国民文化祭に近づくにつれ、事務局よりさらなる情報が発信されるため充足していくと考えられる。

以上を整理すれば、まず理解①は常に求められる情報であったといえる。特に未決定事項を求められることも少なくなかったため「何が」「どのような意思決定プロセス」を経て「いつ頃までに」決定される予定であるかの情報提示が重要と考えられる。また、本ヒアリング調査を通して、責任主体の明示及びスケジュールデザインというマネジメント行為には、地域住民、特に地元キーパーソンによる地域への情報発信を支援する配慮（地域からキーパーソンへの反発に対する回答保留等を正当化する予防策）という重要な機能を有することがわかった。

(2) 理解②「芸術作品が持っているコンセプトの意義と作家の人柄の理解」

図-2 と理解②の充足度を示した図-5 において、理解②の意見数及びその充足度が高いときは作家と地域住民との交流の場が設けられたときであった。

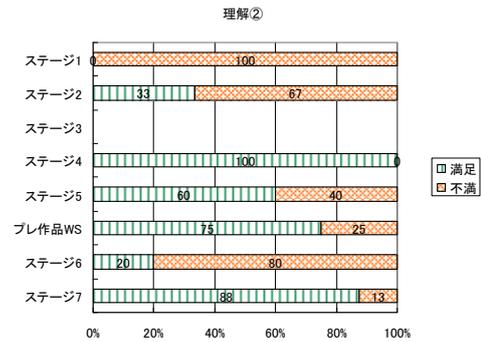


図-5 理解②の充足度の推移

この時期の意見には、「作家自身がコンセプトをもって取り組んでいるし、期待度が高まった。」や「作家さんが地域の人と共に汗を流しながら作品づくりをやってもらえてよかった。」などが目立ち、作家との交流によって理解を深めている様子が伺えた。

(3) 理解③「芸術作品が上勝にできることの将来的意義の理解」

図-6 は理解③の充足度を示しており、この図を見ると一見理解③は徐々に充足されているように見える。

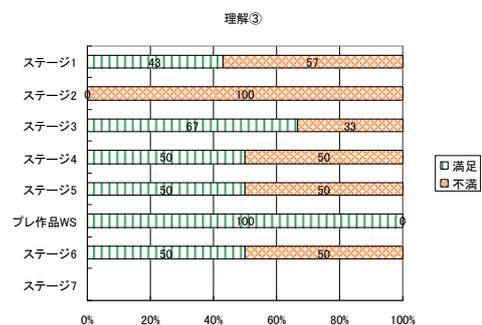


図-6 理解③の充足度の推移

しかし、会議資料には「上勝アートプロジェクトは豊かな里山から価値を学び、里山と対峙し、里山の維持・保全に根ざした、里山をフィールドとした参加型芸術活動」という説明しか記載されておらず、それが地元住民の参加行動を突き動かすものになってなく、実際この文言で理解③が深まった人がいないことが調査より判明している。さらにこれまでプロジェクトの本来の目的をわかりやすく地域住民に語りかけるような場が存在していないことも資料調査や参与観察より確認できている。これより芸術とまちづくりの本来の関係が議論されていないままこのプロセスが進行していることが伺える。

またヒアリングを実施した12人中、理解③をニーズとして意見した人は7人であった。理解①をニーズとして意見した人は11人、理解②をニーズとして意見

した人は10人であることを考慮すると、このプロジェクトプロセスの中で理解①を意識した人は少ないと言える。さらに意識した人が少ないだけでなく、図-2で示しているように理解③のニーズ・関心そのものが減少している。

これは、国民文化祭が間近に迫っており住民のリーダー層にあせりが出てきているためと思われるが、理解③を求めるニーズすら薄れていることは、プロジェクトが継続的活動を目指しているにもかかわらず、イベント型のプロジェクトと住民に捉えられていることを示唆している。

(4) 情報発信方法

事務局側へのヒアリング調査によればインターネット上にプロジェクトのPR情報を掲示したり、情報紙を町内全戸に配布したりしたが、町内からの反応は無かったようである。また、町内参加者へのヒアリング調査でも「広報みたいな一方通行の伝達ではなく電話などでもっと呼びかけて欲しかった」という意見もあった。

上勝町のような中山間地域では地域でリーダーシップを持っている人が情報伝達のキーパーソンとなって地域に情報を伝達する機会が多い。その場合、キーパーソンに地域に情報を伝達してもらえよう環境づくりが重要になる。キーパーソンと考えられる参加者は、「事務局の人が言っていたこのプロジェクトで最終的に何をしたいのかという話を聞いて納得できる部分はあったが、一般の人にそういうことを理論で言っても心には響かないと思った。どう噛み砕いたらいいだろうとかその先に何があるのか考えたが、町内の人が納得できるその画が見つからなかったから言えなかった。」と話しており、これより理解③がうまく理解できないと呼びかけ行動へ移れない様子が伺える。さらに、その参加者は「(作品のコンセプトを聞いて)思っていたコンセプトとは違うなと思った。」と理解②についても話していることと、理解①をキーパーソンが把握していないと地域住民から質問をされたときに答えられない状況になってしまい呼びかけができないことなど、理解①②についても同様にその理解度が呼びかけ行動に強く影響していることが明らかとなった。

4. まとめ

本研究では「上勝アートプロジェクト」について、地元参加者の潜在的ニーズの整理とそこからみえる住民協働意欲の醸成・持続に配慮したプロセスマネジメント上の課題について考察を行った。これらを再度まとめると次のようである。

① プロセス初期段階において2つの事業主体が存在し

たことによりプロジェクト責任体制に関する参加者理解の混乱が生じた可能性が高い。

② 参加者のアートプロジェクトに関する情報を求める潜在的ニーズは大別して3つの理解から構成されていることがわかったとともに、これら3つの理解の精査熟度が参加者の地元地域への呼びかけ行動に大きな影響を与えていることがわかった。

③ 「事業の責任体制と意思決定プロセス、国民文化祭までのスケジュールの理解」は常に求められる情報であり、わかりやすい資料作成と説明が常時必要である。特に「何が」「どのような意思決定プロセス」を経て「いつ頃までに」決定される予定であるかの情報提示が重要と考えられる。

④ 「芸術作品が上勝にできることの将来的意義の理解」を深めた人は少なく、その説明を行うことは役場内、議会など全体の調整・合意を必要とする内容に一部踏み込むことにもなるため事務局にとっても現実には大変困難な状況であったと考えられる。

⑤ 事業本番が間近に迫ると、参加者内においても「芸術作品が上勝にできることの将来的意義の理解」の関心が顕著に減少傾向を示すとともに、「芸術作品が持っているコンセプトの意義と作家の人の理解」「事業の責任体制と意思決定プロセス、国民文化祭までのスケジュールの理解」のニーズによりプロジェクトが進行されており、アートプロジェクトがイベント型(お祭り型)のプロジェクトへの色合いを濃くする傾向が見受けられる。

今後の課題として「芸術作品が上勝にできることの将来的意義の理解」が不足しているためこのプロジェクトは継続的活動への機運が高まらない危険性を有しており、今後、コミュニケーション的改善が一部必要といえる。まず中長期的には、町の将来ビジョンとその中でのプロジェクトの位置づけを提示し、住民の長期的な協働意欲の醸成・持続を促すことが重要と考える。また早急にするべきこととして現在上勝町で見えてきた来訪者のゴミ問題や作品の材料となる間伐材の調達方法などの具体的課題を解決していく過程を通して、住民意識の中に、適正な維持管理に基づく美しい里山づくりの実感・機運を促進するような雰囲気づくりへの行政努力が必要と考えられる。そして、このような全体的雰囲気を、現場観あふれる将来ビジョンづくりの第一歩へとつなげていくことが重要となってくるものと考えられる。

参考文献

- 1) 文化庁文化部：平成17年度 都市再生プロジェクト推進調査費、上勝町での持続的地域づくりを目指した「多重連携交流芸術活動」の基盤づくり報告書、2006。